

華嚴の教主

——因分果分に就て——

淺井 潔

如是我聞一時佛在摩竭提國寂滅道場

舊譯華嚴經の開卷の此の文は所謂六成就を顯す文として他經のそれと全く同様である。從て七處八會能説の佛身は釋尊であると言へば足る譯であるが、華嚴一家に於ては然らず、或は化身なりと言ひ或は實報身なりと言ひ様々の論議があるが、その孰れをも採らずして十身佛の所説とする。即、探玄記第二に

初定佛身者、問此八會佛是何等身、答有人釋云、是化身佛、以菩提樹下八相成道是化身故、不離昇天是重化故、以釋迦異名名盧舍那非別報身故、又有釋云、說此經佛是實報身、以是盧舍那法界身故、居蓮華藏淨土中故、下第七會初歎佛具彼二十一種殊勝功德、是實報也、但以不離化故該此樹下非是化身、今釋、此佛准下文、是十佛之身通三世間、以說十信及三賢等地前所見非實報故、然居華藏非局化故、國土身等非前二故、具攝前二、性融通故具足主

伴如帝網故、是故唯是周遍法界十佛之身

又五教章下には

或非法非報化、如別教一乘、是十佛故也

こゝに十佛に入る前に舍那釋迦の名に就て一言すれば、例へば唯識等では毘盧遮那と盧遮那とを區別して前者を法身、後者を受用身とし、釋迦佛を化身と説くが、華嚴にあつては全く同一に見る。

演義鈔第四に

謂餘教遮那是眞、釋迦是應、故經云、清淨法身毘盧遮那佛、千百億化身釋迦牟尼佛、今既相卽、明是眞應相融故、名號品云、或云毘盧遮那、或名釋迦牟尼、但名異耳

又行願品疏鈔第二に

若准舊梵語、翻毘盧遮那、此云遍一切處寂、屬法身、盧遮那此云光明遍照、屬報身、若准梵文、但新舊別、非分法報之異、故舊譯華嚴惣名盧舍那、唐譯經中、皆曰毘盧遮那、卽三身十身通名毘盧遮那、今此中用法報通稱、此最爲正、況此宗中、法報無異、同是一源、不同諸教有爲無爲別

卽、遮那を法報に限り釋迦を化身に局ると言ふ様な事はなく、三身十身通じて或は遮那と呼び或は釋迦と名付けるので、此の二名は但名が異なるのみで體は同一とするのである。其の兩名を併用する

所以は略策によれば遮那とは即權之實であり、釋迦は即實之權であると言ふ。更に舊經第四には

諸佛子、此四天下佛號不同、或稱悉達、或稱滿月、或稱師子吼、或稱釋迦牟尼、或稱神仙、或稱盧舍那、或稱瞿曇云

とあり、要するに隨宜攝物で一多は機に在り、亦無盡の名を假りて無盡の徳を彰すものであらう。

今此の遮那佛或は釋迦佛は十身佛であると言ふ。華嚴の本經に十佛の説のあるのは先づ十地品第八地に

(一)是菩薩知衆生身、知國土身、知業報身、知聲聞身、知辟支佛身、知菩薩身、知如來身、知法身、知虛空身 (第二十六卷)

(二)知如來身(有)菩提身、願身、化身、力持身、相好莊嚴身、威勢身、意生身、福德身、法身、智身 (第二十六卷)

後の文は前の文中の如來身上に更に十身を具する事を示したもので新譯では(有)の字が入つて居る。次に離世間品に

(三)佛子、菩薩摩訶薩知分別說十種佛、何等爲十、所謂正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、化佛、法界佛、心佛、三昧佛、性佛、如意佛 (第三十七卷)

(四)佛子、菩薩摩訶薩有十種見佛、何等爲十、所謂無著佛安住世間成正覺故、願佛出生故、

業報佛信故、持佛隨順故、涅槃佛永度故、法界佛無處不至故、心佛安住故、三昧佛無量無著故、性佛決定故、如意佛普覆故（第四十二卷）

此の十佛に就て古來行境の十佛、解境の十佛と言ふ事が言はれて居る。その起りは孔目章第二に「若一乘義、所有功德皆不離二種十佛、一行境十佛、謂無著佛等、如離世間品說、二解境十佛、謂第八地三世間中佛身衆生身等、具如彼說」

解境とは通路記第二に解悟照了境界法故とあり、行境とは同く解絶修證境界法故とある。そして加塵章によれば離世間品の十佛とは即第八地所説の如來身上の十身で是を十佛と名付け、如來身上の十身を行境の十佛と名付ける。以上凝然大徳の説に對して南紀錄によれば、至相大師の行境と解境とは説相の中の修因契果生解分（即本經如來名號品より寶王如來性起品まで）の解と、託法進修成行分（離世間品）の行とによつて分けたものなりとし、又此の孔目章文中の離世間品は無著佛等と言ふ所から第四十二卷のみを指し第三十七卷を指さない。之は搜玄記第四下に

前信始但觸、今（第四十二卷）行成故見也

とあるによつても明である。從て至相大師の行境の十佛とは（四）のみで他は悉く解境に屬すると。即芳英師は、解行と言ふ點に重きを置いて考へ、凝然大徳は義によつて説明されたものであらう。而して此の二種の十佛の中、華嚴教主と考へられたものは主として行境の十佛であつた様である。

卽、十玄門に

所謂果者、謂自體究竟寂滅圓果、十佛境界一卽一切、謂十佛世界海、及離世間品明、十佛義是也
又五十要問答には

依一乘教見聞已去乃至會知無生相及應十數見、其十佛一無著佛、安住世間成正覺故、二願佛
出生故云

以上至相大師の説に對し賢首大師は十佛に就て特に解境行境を分つ事はないが、華嚴教主としての佛は前の探玄記第二の文及次の五教章の文により融三世間の十佛を主とせられた様である。

謂此一乘要是盧遮那十身佛、又盡三世間說

尤も五教章を釋するに當り宋朝の道亭等は

十佛者、成正覺佛、願佛、業報佛、住持佛、涅槃佛、法界佛、心佛、三昧佛、本性佛、隨樂佛等、
究竟自證不對機緣、卓然獨得自境界歟（義苑疏第一）

と言ひ行境の十佛を立てるが、我東大寺系の壽靈、凝然等の大徳は融三世間卽解境を主とする。

次に清涼大師にも矢張り解・行の語なく（一）を融三世間の身、其他を如來身上の身とする。卽、

華嚴經疏第一に

言十身者、自有二義、一約融三世間爲十身者、一衆生身、二國土身、三業報身、四聲聞身、

五緣覺身、六菩薩身、七如來身、八智身、九法身、十虛空身、二就佛上自有十身、一菩提身、二願身、三化身、四力持身、五相好莊嚴身、六威勢身、七意生身、八福德身、九法身、十智身、廣顯其相如第八地及離世間品

而して前に引いた第八地及離世間品の十佛の中、後の三は名に多少の相違はあつても義に於て殊るなしとされてゐる(疏第五十一卷)。なほ教主としては疏第一に

故說此經佛並非前說、卽是法界無盡身雲、眞應相融一多無礙、卽盧遮那是釋迦故

とあり、次に今先明十身、後彰無礙とあつて先づ融三世間及佛上の十身を列ねた後、用周、相遍、寂用、依起、眞應、分圓、因果、依正、潛入、圓通無礙の十義によつて其無礙を彰す所からすれば二種の佛身の孰れと言ふよりも寧ろ圓融無礙の點を強調せられたものの様であり、此無礙の箇處の演義鈔には

卽以無障礙法界爲體、含四法界何所不具、故無不卽耳、則未有一法非佛身也

以上儼・藏・涼三祖の所說各相違してゐる様であるが、しかし佛身上の十身は前述の如く融三世間の十身の一たる如來身上に於て之を聞いたものであり、又融三世間の十身は探玄記第十四にもある通り同一大緣起法義分出故に彼處の經文に云ふ如く一々の身に各十身を具して相作無盡であるから、畢竟所謂據實通論と據勝爲論の差に外ならず、されば壽靈大徳は融三世間の十身に六相の圓融

を説き、更に同異二門を以て即入して重重無盡なりと論ぜられたのである。

終に三身十身の相攝に關しては演義鈔第四に

即三身即十身者、若以佛身上十身者、菩提身、願身、化身、力持身、意生身、即三身中化身攝也、相好身、威勢身、福德身、義通報化、法身即法身、智身義通三身、局唯報身故、即三是十即十是三、若約融三世間十身、即三身者、如來身通三身、智身亦通三身、法身、虛空身即法身、餘六通法化、法身體故、隨物應國土等故、

眞言密教は彼の有名なる十住心の教判によつて華嚴を第九極無自性心と判ずる。即此心は顯教の至極なるもので、密佛の驚覺を蒙つて入密して成佛すると言ふ。秘藏寶鑰上に十住心の名を列ねる中に

第九極無自性心、水無自性、遇風即波、法界非極、蒙警忽進

とあるもの之である。覺苑の演密鈔第一には

古來分教總有多岐、且依清涼教類有五、一小乘教、二始教、三終教、四頓教、五圓教、明一位即一切位、一切位即一位、十信滿心即攝五位、成正覺等、依普賢法界帝網重重主伴具足故名圓

教、廣如彼疏、今神變經典與之大同、但顯密爲異耳

と言つて大日經を圓教に攝して居るが、眞言家は之を以て以花嚴圓融自在之義、濫眞言輪圓具足之義ものと斷じ、華嚴を三論、天台、起信等と同列に眞如緣起の分齊とする。卽、寶鑰下に

善無畏三藏說、此極無自性心一句、悉攝華嚴教盡、所以者何、華嚴大意、原始要終明眞如法界不守自性隨緣之義

指心鈔第十三によれば

彼宗雖云無盡緣起、是一心緣起未及三密無盡緣起故、云眞如緣起也、又雖以理成事故談事融、未明性相歷然事常故

かくの如く華嚴を目して遮情淺略と判するものに且く二由が考へられる。一は經論の文によるもので、他は華嚴の祖師自らの言によるものである。前者の中華嚴教主に關して著しきものは釋摩訶衍論である。周知の如く同論は僞作の疑頗る濃厚の本であるが、それは史實の問題で、既に野山大師により密教正依の論典として依用されて居る内容の事ではない。その釋論第十に云く

諸佛甚深廣大義者、卽是通總攝前所說門、所謂通攝三十三種本數法故、此義云何、言諸佛者、則是不二摩訶衍法、所以者何、此不二法形於彼佛其德勝故、大本花嚴契經中作如是說、其圓々海德諸佛勝、其一切佛不能成就圓々海、劣故、若爾何故分流花嚴契經中作如是說、盧舍那佛三

種世間爲其身心、三種世間攝法無餘、彼佛身心亦復無有不攝焉、盧舍那佛雖攝三世間、而攝不攝故、是故無過

以上を解するに當つて唐土、高麗の諸抄と言家の釋意とは甚だ異なる。前者によれば此文は人法に就ての爲言である。即能依の人たる諸佛と所依の法たる圓々海不二摩訶衍とを對比して所依は能依に勝れたるを説くとすに反し、後者は専ら十住心論第九及顯密二經論上の意によつて諸佛即不二摩訶衍とし、之に對して彼佛、一切佛、盧舍那佛等の語を以て表された因佛との間の勝劣を明すものと判する。諸佛とは果海に入つて以後所顯の一切の諸菩薩、二乘、乃至五道の衆生等は皆悉く一佛身となす故に、彼の所現の三乘、五道等を諸佛と名ける所以である。かくて諸抄によれば之は人法相望であり、言家によれば人人相望である。又攝不攝の句は、諸抄によれば或は人劣法勝の故に因分の三世間は攝するも果分の三世間は不攝とし、或は因分は人法差別の故に盧舍那佛攝三世間なるも果分は人法平等なれば不攝と言ふ。言家によれば花嚴の舍那佛は因佛である、從て因分の境界は攝するも果分不二摩訶衍の境界は不攝なりと斷するのである。

次に華嚴祖師の言とは主として五教章を指す。二教論上に先づ章開卷の文を引く。

今將開釋迦佛海印三昧一乘教義、略作十門、初明建立乘者、然此一乘教義分齊開爲二門、一別教二同教、初中亦二、一是性海果分、當是不可說義、何以故、不與教相應故、即十佛自境界

也、故地論云、因分可說果分不可說者是也、二是緣起因分即普賢境界也

言家によれば此の因果二分の中、可說の因分が顯教の分齊で不可說の果分を密教の分齊なりとする。次で章中卷十玄緣起無礙法門義を引く。

夫法界緣起乃自在無窮、今以要門略攝爲二、一者明究竟果證義、即十佛自境界也、二者隨緣約因辯教義、即普賢境界、初義者圓融自在、一即一切一切即一、不可說其相狀耳、如華嚴經中究竟果分國土海及十佛自體融義等者即其事也、不論因陀羅及微細等、此當不可說義、何以故、不與教相應故、故地論云、因分可說果分不可說者即其義也、問義若如是、何故經中乃說佛不思議品等果耶、答此果義是約緣形對爲成因故說此果、非據究竟自在果、所以然者、爲不思議法品等與因位同會而說故、知形對耳

即若し因分の可說なるに反し果分不可說にして言語道斷、所被の機根を離るゝとならば、何が故に經中に果分の功德を説くやとの問に對し、經中恣に果分の境を説くと謂ふに非ず、唯普賢因分の義を助成せんが爲にのみ強て此の果徳を説く、之方に還て此の因分の法を成立する所以である。かくて二教論上に

夫佛有三身、教則二種、應化開說名曰顯教、言顯略逗機、法佛談話謂之密藏、言祕奧實說
と言ひ又付法傳には

法報應化體同用異、所謂報應化佛者、亦名十身盧舍那大小釋迦等、常途顯教之主是也、此報應化身則上包十地滿下括六趣等、對種種根機以種々方便說種々法門、其所說教則大小乘所攝花嚴法花般若寶積最勝涅槃等、及阿含等一百落又部經是也、語其宗要則菩薩四攝六度聲聞緣覺四諦十二緣三十七菩提分、及人天種々善法是也、並是隨他意說方便門也

とあつて華嚴教主たる十身盧舍那佛を報身の分齊に攝する事明である。之に就き宗義決擇集第十九に華嚴教主なる論題を設けて決擇して居るが、難者の問には華嚴の諸書を擧ぐるも、豎者の答の内容は主として上の付法傳の文の解釋如何に關し華嚴家の説には餘り言及して居ない。

初の釋論の文に就ては華嚴家に於て之に觸れて居るものは集成記、復古記等であるが孰れも一應の註解に過ぎない様であるから、こゝに第二の點即五教章文の方を考へるのに、因分果分に關してはもと本經十地品及十地經論に出で、探玄記を始め華嚴經疏其他に之が解説が見られる。其の中探玄記第十に於ては先に古説を叙して評定を加へ次で自義を述べて居る。それによれば十地に二分あつて一は就實十地、二は隨相十地で、前者が果分、即、唯佛所知佛智所行であり、後者が因分、即菩薩所知菩薩所行である。此の因果二分の義は亦十地品に限らず一部經中大意に通ずる。以上の外

に探玄記によれば更に第二重の二分がある。卽證智を以て果分とし、方便寄法に約して地の差別を顯するを因分とする。前者は離相離言不可説であり、後は衆生をして此の表顯によつて十地の義を解せしむる所以である。而して此の二分は當十地品に局るとなすのであるから、五教章を見るには一應は初重の二分を以てすべきで、言家の意も亦之に外ならないであらう。

上述の五教章文の言家による解釋は、不可説の果分が密教の分齊なりと言ふ點を除けば、華嚴家によるも大差はない。但、二教論に引く初の章文に五教章では尙次の如き文が続く

此二無二全體遍收、其猶波水、思之可見

此二とは勿論性海果分と緣起因分とを指す。卽、因は是れ攬果爲因で果外に因ある譯ではなく果と無二であり、果亦攬因爲果で因外に果なく因と無二である。かくて果卽因因卽果で因門果を攝して餘す所なく、果門亦因を攝盡する。一塵の法若し果門を以て之を見れば、自體究竟、周遍法界、一卽一切、一切卽一であり、教説を離れ機見を絶するが、因門を以て之を見れば、融通無礙、主伴具足、重々帝網、緣起森羅にして、教説駢填し機縁の了知する所である。こゝに言家は言ふ、二分不二と云ふと雖果分不可説と曰ふ、果に在つて不二と云はず、卽顯教の分齊なりと。之は若し果上の因果の事であるならば華嚴も亦果上の因果を説く。普賢行品及性起品の所説がそれである。而して全に果分所證を攬つて機根に示したのが華嚴一部の法義であるから所攬は果分なるも既に根

縁に對する故に果を以て全に因分と名ける。從て果分不可説とは相即圓融等の因分所有の一切の法義が果分中に無いと云ふのではない。所有の義門に差異はないが唯自境界と機根に示すとの區別があるのみである。

更に可説不可説を細見すれば探玄記第十によるに能詮の説と所詮の義とに各三義がある。義の三義とは、一に果海に約して、總標して人をして果海ありと知らしめ得る所可説であり、指斥して示し得ない所不可説である。二に證處に約して、既に此の所證離相離名なれば此法を不可説と言ふが、此の不可説と言ふ語自身は彼法に當る故に可説である。三に本智に約して、遮詮を以て解せしむる故に可説であり、直詮の逮ばざる所不可説である。次に説の三義とは、一に後得智に約して、事に従つて言辭を以て分別し得る故に可説であり、又後得智は必ず證眞に由るが之は出世間なれば不可説である。二に加行智に約して、是れ意言の觀なれば可説なるも、觀中の行相は言至らざる故に不可説である。尙一般的に言へば諸法の自相は不可説なるも、共相は可説である。三に所寄の法に約して、此の法に寄せて人をして十地を解せしむる故に可説と名くるも、此法を以て直に十地とする譯には行かない所不可説である。而して以上の義及説の六義は互に雙融する事を示して

就雙融中、此上六中各説即無説、無説即説、無二俱融准思可見

とあり、又

此上不可說皆各不異於可說、以眞理普遍故、可說不異不可說、以緣修無性故
と言ひ、更に疏第三十三には

若有因緣「因果可寄言、卽事入玄因亦卽說、故云說少分也、不可局執」

とある。故に可說不可說の言は、或法は定で可說であり他の法は定で不可說なりと謂ふのではなくして、眞妄、有無等の言と同様に一切の法に就て或は全に可說であり或は全に不可說である。かくして因分果分及その說不說共に無礙圓融の外に出るものではない。

此の自證果分の說不言ふ事は、その果分を説くと言ふのと、果分が説くと言ふのとで問題の形は少しく變つて居るが、華嚴家に於てのみならず眞言家にあつても亦重大な問題で、古義新義各派の決擇書數多ある中、一として之を論ぜざるはなく、堅敵の意趣、成立の義理も甚だ多様である如くである。其の最も著しきは古義宗決の本地自性身說と新義第三重の加持身說とであらう。又之に關聯して果分は如何なる意味に於ても機縁を絶するか否かに就て、かの自性會因人の論則がある。即、古義派は自證會に實行の因人あるを容し、新義派は無しと成立する。此等の點を更に審にするには勢ひ兩家教理の全般に涉らなければならぬ事になる。

凡そ言家の華嚴を目して無明緣起の分齊となすもの、其の據として上の如く釋論、二教論等を引き、教理上より見て眞言の本有表徳に對して修生遮情なりとするに由來するもの、様である。從

て般若、起信は固より天台の諸法實相、華嚴の事々無礙も畢竟するに歸する所無相平等の空理なりと見るが、他は且く措き華嚴の所説も亦之に過ないであらうか。元來華嚴にあつては同別二教と稱し、その同教として或は三乘を一乘に同じ或は一乘を三乘に同じて説く故にしかく考へられる箇所も少くないが、今華嚴家に於て緣起を談するの二通りある。一は常途の緣起で、緣合すれば有、緣散すれば空と言ふ三乘の説と其の根本に於て大差はないが、他のものは正しくは之を性起と呼び外縁の合散によつて起不起を異にせざる法爾の性徳を明すものである。即、行願記に云ふ如く、世出世一切の諸法全に是れ性起にして性外更に別法なく、諸佛衆生と交徹し、淨土穢土と融通し、法々皆彼此互收、塵々悉く世界を包含して相即相入、十玄門を具して重々無盡なるもの全く性起によるのである。性起の因果平等にしてしかも因因たり果果たり生佛宛然なる所別教一乘の三乘五乘に超過する圓旨であらう。

以上眞言密教に因つて華嚴の難點と見做される所を考へたので、僅に古徳の言句を列ねただけに過ないが、他家から見れば又別に考ふ可き點も多々ある譯である。